

「観光立市・やまぐち」―観光産業の パワーアップによる持続的な地域発展を求めて

山口市長 渡辺純忠



歴史の道「萩往還」と山口市

歴史の道「萩往還」は、慶長9年（1604年）毛利輝元により日本海に面した萩（現在の萩市）に萩城が築城されて後、萩と瀬戸内の三田尻港（現在の防府市）をほぼ直線



萩往還 天花坂口

で結んだ参勤交代の「御成道」として拓かれ、山陰・山陽間を結ぶ重要な交通路であった。

山口（現在の山口市）は、この萩往還のほぼ中間に位置しており、正平15年（1360年）頃に守護大名の第24代大内弘世が京の都を模してまちづくりを始めてから、戦国時代の太田氏の滅亡までの約200年の間に、大内氏が大陸との交易で手にした強大な経済力を背景に、京から多くの文化人を招くなど、京や大陸の文化に影響された独自の文化「大内文化」とともに「西の京」として栄えたまちである。

国宝瑠璃光寺五重塔をはじめ、常栄寺雪舟庭や大内氏館跡（龍福寺）など、萩往還の沿線周辺にはこの時代の史跡が多く、江戸時代

に萩往還として整備される前においても、重要な交通路とされていたことが窺える。

江戸時代における山口は、政治や文化の中心地から、萩往還をはじめとした陸上交通路の主要結節点へと役割が変わっていったが、大内文化により長年培った進取の気風を受け継ぎながら、伝統都市として近世的な発展を遂げていった。

そして山口のまちに再度大きな転換期が訪れたのが幕末である。文久3年（1863年）、毛利敬親により、外国からの防衛や藩内統制の利便性の観点から、藩庁が萩から山口に移され、山口は再び藩政の中心となった。そのころから、多くの明治維新の志士たちが山口に集い、新しい時代を模索



日本三名塔 国宝瑠璃光寺五重塔

し、また討議を重ね、そして行動に移していった。時代の変革に挑む志士たちにとって、山口は「明治維新の策源地」だったのである。藩庁内に建てられた「藩庁門」や茶室「露山堂」、薩長同盟の密約が交わされた「枕流亭」、藩庁移鎮後の

役人の宿泊所であり高杉晋作や久坂玄瑞らも出入りした「十朋亭」など、この時代の史跡も萩往還の沿線周辺に点在しており、熱き志を胸に萩往還を駆け抜ける維新の志士達の姿が今も目に浮かぶようである。このように山口が「明治維新の策源地」となり得た背景には、街道の往来によりもたらされた高度な文化の発達と交通結節点としての地理的要因にあるものと考えられる。

観光まちづくり

「観光立市・やまぐち」

本市では「山口市観光交流基本計画」を策定し、基本理念として「観光立市・やまぐち」の実現を掲げている。観光産業は多様な産業と密接に関連することから、地域社会に与える影響は大きく、その効果も地域経済はもとより、社会・文化・環境・教育へと波及し、結果として「地域づくり」「人づくり」につながっていく産業である。本市は、大内文化や明治維新をはじめとする豊かな歴史的資源に恵まれ、長い歴史にはぐくまれた個性的な文化や風土が今に受け継がれている。これからの山口市観

光においては、これらの観光資源を活用し、個性ある魅力的な観光地づくりを行うとともに、市民の皆さまの主体的な参加によって、人と人、文化と文化の交流を進め、市民生活を豊かにし、活力ある地域づくりにつなげていく、つまり、来訪者、生活者の双方にとって個性ある魅力的な山口市の実現、いわば「観光まちづくり」の取り組みが欠かせない。

その象徴的な取り組みの1つに萩往還の整備・活用がある。昭和56年度から約8年間の保存整備事業とその後の維持管理をはじめ、平成23年からは萩市・防府市・山口市の観光関係団体



山口への藩庁移鎮の際に建てられた「藩庁門」

と行政が一体となって立ち上げた「萩往還観光誘致制度創設委員会」によるPR活動や、市民組織「やまぐち萩往還語り部の会」によるガイド活動を行っており、平成25年には山口市において「全国街道交流会議第9回全国大会」を開催した。そして現在は、平成30年の明治維新150年に向けたさまざまな記念事業が催されており、これらすべて、行政

と観光産業、そして市民の皆さまとの協働のもとに取り組んできている。萩往還とその沿線の景観、歴史文化史跡の保存と活用には、このまちの人々の愛情と熱意が注ぎ込まれている。歴史の道「萩往還」は今後益々、歴史と文化、産業と生活、地域と地域をつなぐ「観光まちづくりの結節点」として、重要な役割を果たしていくだろう。

一口メモ

萩往還

明治維新策源地の地・山口の萩往還

山口は大内氏によりまちづくりが着手されたが、まちの中心部からは放射状に道が造られており、山口と各地とを結んでいた。毛利氏の萩入府後、その道のひとつが参勤交代路として整備されて「萩往還」となった。

幕末には、藩庁が「萩往還」の起点・萩か



ら中間地点である山口へ移り、多くの維新の志士たちが山口に集うこととなった。

毛利侯が萩城下を出るにあたり、その理由を、湯田温泉への湯治としたが、以降、萩へ戻ることにはなかつた、というエピソードも伝わっている。